

[4] 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

行基菩薩、まだ若くおはしける時、智光法師に論議に合ひ給ひけるを、智光少し驕慢の心やありけん、若き敵に逢ひたりと思へる気色なりければ、歌を詠みかけられける。

真福田<sup>まふくだ</sup>が修行に出でし片袴我こそ縫ひ<sup>1</sup>しかその片袴

かく言はれて、「二生の人にこそおはしけれ」と<sup>2</sup>帰伏<sup>きふく</sup>しにけり。この事は、行基菩薩の<sup>3</sup>前の身に、大和の国なりける長者とぞ言ひけれど、国の大領などいふものにやありけん、その家の娘のいみじく<sup>4</sup>かしづきけるが、容貌<sup>かたち</sup>などいとかしかりけるを、門守する女のありけるが、子に真福田といふ童ありけり。十七、八ばかりなりけるが、その家の娘をほのかに見て、人知れず病になりて、死ぬべくなりにける時に、母の女その由を問ひ聞きて、「我が子生きて給ひてんや」と洩らし言ひたりければ、娘「大方は安かるべきやうなる事なれど、無下にその童さまにては、<sup>5</sup>さすがなりぬべし。さるべからん寺に行きて、法師になりて、学問よくして、才ある僧になりて来たらん時逢はん」と言はせたりければ、かくと聞きて、急ぎ出で立ちける。「童の着るべかりける袴持て来。我縫ひて取らせん」と言ひければ、母の女喜びながら、<sup>6</sup>忍びて参らせたりけるを、片袴をなん縫ひて取らせたりける。さて、寺に行きて、師につきて学問を夜昼しければ、

〔出典〕

『古来風体抄』上行基

〔重要語句〕

- 気色
- かしづく
- 容貌<sup>かたち</sup>
- をかし
- 無下に
- さすが
- 才
- あさまし
- めでたし

二、三年ばかりに、殊の外の智者になりけり。さて、後來たりければ、「今宵」と言ひて逢ひたりける程に、この娘、俄かに消え入るやうにて亡くなりけり。法師あさましく悲しく覚えて、寺に帰りて、道心深く起こしていよいよ尊くなりけり。されど、我が童名「真福田」といふこと、僧の中には、さしも知らせざりけるを、年経て、行基といふ若き智者の出で来たりけるに、論議に合ひたる程に、その昔名をかく言ひて、「我こそ縫ひしかその片袴」と言ひけるに、思ひ続ければ、「我もと道心を起こし始めし女は、即ち、この行基にこそおはしけれど、我が身を尊き僧になさんとて、しばし仮にかの女と生まれて見えたりける」と心得るに、<sup>8</sup>尊く、めでたくも恥も覚ゆるなり。善智識はまことに大の因縁なるものなり。

〔「古来風体抄」による〕

(注) ○論議——仏教の教義について議論すること。

○片袴——僧のはく短い袴。

○大領——長官。

問一 傍線部1の助動詞「しか」の職能(働き)として最適なもの<sup>ア</sup>を次の<sup>ア</sup>から選び、記号で答えよ。

ア 婉曲の意の過去

イ 伝聞した過去

ウ 推量した過去